

忘れられた パンデミック

スペイン・インフルエンザ

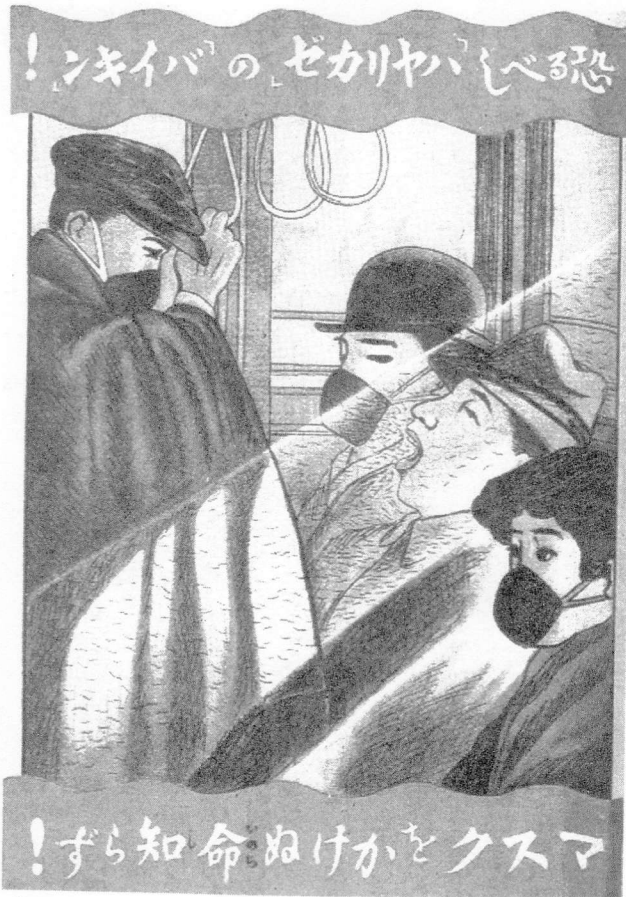
▶ 下

「どんな疫病だろうが戦争だそうが飢饉(ききん)だろうが、これほど多くの人間が、これほど短期間に亡くなった例はない」

米国の「スペイン・インフルエンザ」被害を詳細にまとめた名著といわれる「史上最悪のインフルエンザ」で、著者の歴史学者アルフレッド・W・クロスビーはこう述べている。だが、この本の原題は「アメリカの忘れられたパンデミック」である。戦争も自然災害をも上回る人的被害を出したにもかかわらず、人々は忘れてしまったのだ。それは日本も同じだった。「日本を襲ったスペイン・インフルエンザ」を著した歴史人口学者の速水融

過去を知ることが教訓

第2波への備えを



「スペイン・インフルエンザ、流行当時の予防啓発ポスター(内務省衛生局編「流行性感冒」より)

私たちは100年前のパンデミックから何を学ぶべきなのか。

「史上最悪のインフルエンザ」の訳者で、米疾病対策センター(CDC)に在籍経験がある仙台医療センターの西村秀一ウイルス専門家「長は「当時は他の疫病で亡くなる人も多く、平均寿命も短かった。死を目前にするのが日常的で、それに慣れていたことも忘却の要因ではないか」と話す。西村氏は「インフルエンザの怖いところは一度にたくさんの方が感染すること。致死率が低くても、感染者の数が多ければ死者の絶対数は多くなる」と警告する。致死率が高く、すぐに重篤になる場合は患者は動き回れず、感染は簡単に広がらない。大半が軽症ですむ感染症こそ警戒すべきだという。

現在、世界を苦しめている新型コロナウイルスと類する限り永久に繰り返される「からだ」といえる。西村氏は「脅しすぎはよくないが、パンデミックは第2波がありえる。冬に来ると被害が大きい。為政者、行政は腹をくくって医療体制などの準備を進めておくべきだ。いまはそのための時間をもらっていると考える。『コロナという二次被害を防ぐのは大事だが、それによる経済的な二次被害で死者を出しては元も子もない。貧困者などの手当ての大切さも教訓』と言っている。速水氏は著書で、日本はパンデミックから「何も学ばず、45万人の生命を無駄にした」と突き放している。そして学ばなかったこと自体を教訓として、被害の実際を知り、人々がどう対処したかを知ることが重要だと説いている。

なぜなら、人類とウイルスの戦いは「両者が存在する限り永久に繰り返される」からだ。

「スペイン・インフルエンザの致死率は2%程度だった。21世紀に出現した重症急性呼吸器症候群(SAR S)約10%、中東呼吸器

氏は「驚くべきことに、こやられたと指摘されている。さらに大きな要因として、インフルエンザの致死率が低かったことも影響しているという。スペイン・インフルエンザの全流行期を通じて、致死率は2%程度だった。21世紀に出現した重症急性呼吸器症候群(SAR S)約10%、中東呼吸器

氏は「驚くべきことに、こやられたと指摘されている。さらに大きな要因として、インフルエンザの致死率が低かったことも影響しているという。スペイン・インフルエンザの全流行期を通じて、致死率は2%程度だった。21世紀に出現した重症急性呼吸器症候群(SAR S)約10%、中東呼吸器

似した面は多い。では、私(編集委員 井上亮)